

事業報告書 (平成29年度)

事業名 旭川流域大学～源流から児島湾まで、水辺の生物観察から見えてきたもの～
シンポジウムと巡回展示

団体名 旭川源流大学実行委員会

担当者名 吉鷹一郎

※活動の様子がわかる写真(データもお願いします)と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容(日時、場所、参加対象者、人数、内容等)

はじめに

流域の連携へ＝旭川の自然史解明から産まれる協力という宝物



旭川源流大学実行委員会(以下、当会)は、岡山野生生物調査会に事務局を置き、岡山理科大学の各研究室の先生と学生・院生と中学と高校のクラブ活動の顧問教師が協働して、研究対象の旭川流域の自然史解明の一助として、10年前に結成されました。旭川源流の3か所の富地区・哀庭新庄地区・蒜山津黒地区を毎年3年後と巡

回して宿泊研修を行う「旭川源流大学」を第9回まで実施して来ました。また同時に、「旭川かいぼり調査」の勝山・竹枝への運営・企画・参加の経験も積み上げてきています。「大野川源流の西日本最大規模の産廃最終処分場建設問題を地元の方々に寄り添いながら「大野川・宇甘川生き物調査」を毎年実施して流域での課題の解決にも立ち向かってきました。源流から海までの各地元の地域おこしの団体との協働作業で連携することや、市民も含めた若者達の自然観察の宿泊研修や日帰りの観察体験プログラムの開発・実施・運営などをめざしました。自然史解明の取り組みが流域連携という宝物になることを目指しました。

2年経過旭川流域での巡回展示「旭川の生き物展」



岡山市民向けの観察会の活動報告は、これまで岡山市内の中区沢田にある「操山公園里山センター」の2階展示コーナーに8年前からセンターの職員の方々の好意によりパネルや写真展示を行ってきました。毎年の旭川源流～児島湾までの様々な観察会記録や近年の竹枝や勝山での旭川かいぼり調査の記録やパネルなど、また、「ESD関係の全国発表会」や

高校生とともに発表参加した「日韓青少年水フォーラム」や「いい川いい川づくりワークショップ」や「水生昆虫研究会」や当会で研究支援をした地元の大学生の卒業研究論

文の発表会などに発表したエントリーパネルの展示を行ってきましたが、もっと流域の公民館などで多くの市民に旭川の自然の魅力や最近の市民活動の広がりなどをお伝えしたいと考えて、公民館などを巡回展示する企画「旭川の生き物展」を2年前からはじめてきました。

『自然観察で流域の人の心をつなぐ』

2017年は、操南公民館（左写真6月19日～7月11日）・操山公園甲山センター（9月25日～10月28日及び1月4日～1月31日）・光南台公民館（8月8日～8月22日）に加えて、久米南町役場（8月21日～8月25日）・建部町公民館（10月30日～11月14日）・建部町文化センター（8月22日～8月29日）・岡山ふれあいセンター（7月11日～7月25日）・金川コミュニティセンター（9月26日～10月3日）の各会場でも地元の方々に



お世話頂き展示させていただきました。また、事業期間ではありませんが、2018年2月25日には、これまで10年間以上調査を続けてきている鏡野町富地区の「富地区文化祭」に調査パネルを展示解説させていただきました。地元の富地区産のオオサンショウウオが全て日本

産の在来種であることが理科大の斎藤達昭研究室のDNA分析で確認されたことを受けて、地元市民への説明のために地元のオオサンショウウオ調査のパネル展示解説を行いました。なお、パネルと共に春の山野草（御津天満のセツブンソウ1鉢・御津金川の聚摩さんから借り受けたユキワリソウ＝スハマソウ3鉢）の鉢植えを展示して、まだ山沿い雪残る花待つ富の方々に見て頂きました。富地区文化祭は大盛況で県の文化財保護専門家も来訪されパネル解説を見学して頂きました。

海から源流まで川全体の繋がりを見直す契機に

富地区を含めて全9会場での巡回展示企画と2回のシンポジウムを合わせた全体の取り組み参加者は見学者総数が、300人から1000人、関係スタッフは延約60人（展示運営と撤収を含む）、搬送車両は延20両で、走行合計距離は合計約10000km、消費燃油量は合計約7000ℓでした。勿論、1枚1枚の写真撮影に費やした会員の労力はこの何倍にもなっていると思います。関係経費の大半は関係者の寄付による見えない金額が多く、写真や活動パネルを提供して下さった方々や地域の活動団体の皆さんの持ち込み等の好意によって本部経費の突額を抑えて頂きました。この企画をご支援して頂いたことで海から源流

までの繋がりが感じられる企画となりました。これを契機にして川全体の繋がりを見直すことに少しでも寄与できたものと思われまます。

継続していく価値ある企画＝流域で対話する巡回展『旭川の生き物展』



多くの方たちのご支援に支えられて、当会の目標に掲げた「今、旭川はどうなっているのか＝生物の観察や研究で流域の人の心をつなぐ＝旭川の自然史解明を市民の手で」が少しでも達成できたと感じることができました。このことは当会の関係事業の、昨年7月と11月に真庭市勝山と建部町竹枝で行われた「旭川かいぼり調査」及び、6月と

10月の御津虎介の「大野川ホタル調査・生き物調査」に関わって頂いた多くの市民の方たちの熱意がさらに多くの人たちの心に感動を呼んだことに大きく依拠するものがあります。当会の「これからの10年」を展望したとき、「自然観察で流域の人の心をつなぐ」というダイナミズムを感じることができたことが最も大きな成果であったと言えます。今回の企画を継続していく価値を強く感じております。

自然観察の力を考えるシンポジウム＝めだかの学校を自然環境団体の新たな交流の場に岡山市環境学習センター「めだかの学校」を会場に、「川に関わる環境学習を考える集い＝自然観察・野外活動シンポジウム」（通称：旭川シンポジウム）を、第1回平成29年8月20日第2回平成29年12月17日に2回開催しました。参加者は合計で約40人。講師には第1回は岡山県シニアリングネイチャーゲーム協会の講師と岡山理科大学の講師の先生にそれぞれこれまでの活動から自然観察（自然感察）の楽しさや面白さを語って頂きました。地元の「竹枝かいぼり調査」の世話人の皆さんと「里山たけべ」の皆さんからは活動の



思い出を語って頂きました。参加者の大半が高校生と大学生という中でそれぞれの「これからの10年間」を考えて行く上で貴重な宝物を得ていたようでした。アンケートの回収率は100%で満足度と次回期待率は共に80%以上でした。

2. ESDの視点を取り入れたところ、ESDの視点で見直したところ

流域の対話から生まれる流域連携の再構築=対話の機会を作る

旭川や県内各地の自然情報を当会独自のネットへの投稿とホームページ更新でこれまで会員や会員以外ネットユーザーに届けてきましたが、ネット利用者が住民の半数以下である中上流域の住民の皆さんへ情報を伝えて意見を集めていくにはどうすればよいか考えました。今回の巡回展示企画は、この点に注目して「対話のできる巡回展示」を目指しました。会員が直接出かけて行って、見学者が気に入った1枚の生き物のパネルや写真を契機にして、流域で様々な対話をして意見を集めました。下流のことを上流に伝え、上流のことを下流に伝えることを行いました。上流域の展示では、下流の児島湾と海の色落ち問題が川の栄養が減ってきていることが原因であることを伝え、下流域の展示では、源流のオオサンショウウオやゲンジボタルが稲作文化の中で歴史的に人間社会と共存してきたことを伝



えていきました。また、産廃処分場の立地問題や干潟と浜辺の再生の問題などの流域の課題については、当事者に代わって展示会場で説明を行いました。これによって、流域の連携の可能性が深まり、様々な可能性が広がっていくことが実感できました。旭川

流域の人と自然の「持続可能性」を保障する流域の人のネットワークの再構築が目指す目標と考えて行動していきました。8会場の巡回展と2回の自然観察シンポジウムでは、「学ぶ」「楽しむ」「知る」「捉え直す」をキーワードに取り組みました。一つの企画が、様々な効果を生むように相乗効果を考えて企画運営をしていきました。できるだけ多くの人の出会いが生まれるように工夫をしていきました。そして、『人間を生命の頂点に置くのではなく、生命の網の目の一つとして感じる謙虚な認識』(注1)という世界のエコロジー思想の到達点を、「食物連鎖」など現代科学の生態学の研究成果に支えられた生活スタイルとして取り戻すことを大切にしています。取り戻すと言っても、この『エコロジー』の思考は、実は日本にも「方丈記」の鴨長明や「和歌」西行法師などの文学にも垣間見られる思考と思われま。日本の文化潮流の和歌や後の俳句・茶道・花道に在る『花鳥風月』『わびさび』『数寄』などに示された思考「人と自然の一体感に人生の美を見て質素な生活に価値を見出す英知」として元来伝えられた思考でもあると思います。最近マスコミにも取り上げられてきた『ロハスタイル』のLOHAS=とは、アメリカの位階の測量士でありながらもアメリカ最大のネイチャーライティングの文学者であり哲学者で、自然保護思想の創始者のひとりであるヘンリー・デヴィッド・ソローが最初に提唱したものです。この思考は、四季折々の味わい深い多様な自然を有する奇跡のような「宝の島」である日本列島に3万年前から住み着いた我々

の祖先から脈々と伝わってきている生活スタイル＝「花鳥風月を感じて自然との一体感や循環を大切に出来る限り質素に暮らすこと」にとっても良く似ていると言えます。まるで、アメリカ人のソローが、アジア大陸から1万年前にアメリカ大陸へ移住してきたアメリカ原住民から教えられたのではないのだろうかと考えてみたいほどなのです。また、現代の世界のESD活動の思想についても、明治から昭和の西洋文化偏重で起こった日本の伝統文化に比べての大混乱の時代を除けば、極めて粘り強く伝統的価値を重んじてきた日本人文化は古来より到達していた思想でもあったかのようにも思います。17世紀にヨーロッパ各地の大都市部で猛威を振るったペスト菌「黒死病」の大流行の中でも、日本の江戸は100万人を超える大都市でありながらもじつに清潔で衛生的な都市空間を創っていた衝撃的な事実、この「自然と人の一体感や循環を大切にするという日本人の古来からの価値観」に少なからず依拠しているのではないかと思います。

注1：NHKカルチャーラジオ文学の世界、初めてのソロー森に息づくメッセージ、ウォールデン森の生活(1)45ページ、伊藤紹子NHK出版2017年1月1日発行)

3. 取組の成果(参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など)

海から源流まで川全体の繋がりを見直す契機に

アンケートも少数ながら大人からも子どもからも頂きました。大人からのアンケート用紙には、「旭川は海と源流は繋がっていて、様々な問題も川全体の繋がりの中で考えないといけないんだということが良くわかりました。」と、大変うれしいメッセージを戴きました。また、この方は、当会の1月の総会に参加されて会員になって頂きました。

地元の地域活動と交流

操南公民館で児島湾の生き物をメインに展示、見学者とのギャラリートークでは昔の地域の姿に話が咲き、地元歴史サークルに児島湾の歴史と生物の講演も頼まれました。

パネル資材などの保管場所を提供して頂いている建部町の環境学習センター「めだかの学校」からは、田地子川の「水辺教室」の依頼がありました。

情報の伝達はハイテクよりもローテクが良い＝地元に出かける巡回展示は面白い

半数以上の方が情報難民といわれる状況の中で、流域の情報を伝えるには、直接地元に出かけて行って調査結果を写真なども交えてわかりやすく伝えることを考えて展示を行いました。ハイテクの情報化の時代にも拘わらず敢えて、『流域で対話する』ために、ローテクの象徴である手作りのプラボードや模造紙に貼った写真パネルを抱えて流域の公民館展示することにも、改めて価値を見出して今後ともこだわっていきたいと思います。旭川流域での様々な自然観察や大学の調査活動や地域の問題が地元の方々にダイレクトに展示されることで「流域全体で対話する」チャンスを増やすことができると今回の企画を通じて確信できました。

天然記念物や絶滅危惧種に関する新たな情報も入手

この「対話」の中から、思わぬ地元情報が手に入ることもありました。一つは、児島湾にかつて棲んでいた国天然記念物のカブトガニが、笠岡のカブトガニ博物館に多数贈られて現地笠岡のカブトガニの絶滅を防いだということ、当時搬送作業に関わった年配者から聞き出すということがありました。二つ目は、環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類の種で「種の保



存法」にも指定された「オキナグサ」は、30年くらい前までは宇甘川の河原に普通に自生していたことを聞き出すということがあります。この方は、現在岡山市の支援も受けて環境省レッドリストで準絶滅危惧種のセブンソウの自生地の保護を長年されています。岡山市民の宝物を育てておられるとも言えると思います。

10年前の調査が契機で源流の里から研究者が誕生

流域の自然調査を進めている理科大学と当会の関わったことですが、10年前に富地区の清流白賀川でオオサンショウウオ卵塊の流出事件がありました。発見者は当会と共同して水生昆虫を研究していた理科大学の学生でした。この卵塊の保護と孵化と幼生の飼育という岡



山県内では例の少ない扱いを巡って議論になりましたが、このとき偶然にも富中学の教師の中に数少ない専門研究者が赴任していることが分かり、急遽地元の富中学校での飼育保護ということになりました。この飼育観察を経験した中学生が10年後に地元の調査で大学の卒論研究を行いました、そして今年の春、高校教師として旅立ち

ます。私たちの取り組みから研究者の誕生を見られたことは無上の喜びでありました。「自然観察の感動が人を育てる」ことの実例を、目のあたりにして、この方向に間違いはなかったことを確信できました。

4. 今後の課題と展望

感動を羅針盤に＝「自然観察の感動は人を育てる」

盲目という障害をお持ちにも拘らず自然体験活動を長年指導しておられる講師の先生がお話しされたことですが、「自然を感じるという感動」「自然を介して人と人が響き合うという感動」は、障害の有無にかかわらず確かに存在していて、それはやがて「人生の宝物」となっていくということでした。「自然観察」という言葉を、先生の特有の造語である「自然感察」という言葉でいいかえられたときに、参加者の皆さんの心に巻き起こった「不思議な感動」は忘れることができませんでした。「自然観察の楽しさを感じる自分の発見」は傷害の有無にかかわらず求めることが可能であるということを知り明かしてくれたように感じられました。これまで、岡川の自然観察ポイントや体験プログラムを開発してきた当会ですが、募集対象の市民をさらに広げていくことの可能性も感じています。また、障害者の気持ちに健常者が収めて寄り添うことから生まれる「不思議な感動」を体験するプログラムも今後挑戦する課題となってきています。更に楽しみが大きく広がる「旭川の自然観察ワールド」が我々に与えるエネルギーを甘受しながら精進して参りたいと思います。

(様式第8号)

当会の設立時期に合言葉にした「自然に感動する自分の発見」という言葉から、「自然観察の感動は人を育てる」というキーワードに進化させて言葉を磨いて、パワーアップさせていきたいと思います。

多くの学びに感謝

これまで当会の活動を支えて頂いてきました岡山市ESD協議会の皆さまをはじめ、お世話になりました多くの関係者の方々に心より感謝の意を申し上げます。この企画を通して実に多くのことを学習することができました。誠にありがとうございました。

